

発注者支援型マネジメント方式の取組み(その2)

—効果的な現地視察対応のあり方—

(社)近畿建設協会 谷口 昭 *1
同 田中 公市 *1
同 ○倉橋 亜紀 *1

By Akira TANIGUCHI, Koichi TANAKA, Aki KURAHASHI

第二京阪道路事業は、国土交通省近畿地方整備局とNEXCO西日本との合併施工により、平成21年度末供用に向けて鋭意事業が進められている。本事業の推進にあたっては、計画的かつ確実な推進を図る目的で「第二京阪道路事業推進室」が浪速国道事務所に設置されるとともに、発注者支援型マネジメント方式として事業監理補助業務を近畿建設協会が受託している。

本報告は、大規模事業における発注者支援として供用に向け積極的な事業推進に努めるなかで、現地視察者に対する対応窓口としての業務も担当し、本業務を通じた集約情報を有効に活用して視察対応に取り組んだ内容と効果的な現地対応のあり方について述べる。

【キーワード】 発注者支援、事業監理、視察対応

1. はじめに

第二京阪道路は京都と大阪を結ぶ延長 28.3km の自動車専用道路であり、一般国道 1 号の慢性的な渋滞解消を目的としている。(図-1 参照)

浪速国道事務所では、本事業を平成 21 年度末供用に向けて計画的かつ確実に推進するため「第二京阪道路事業推進室」(以下、推進室)が平成 17 年度に設置された。あわせて、近畿建設協会では『第二京阪道路事業監理補助業務』(以下、事業監理補助業務)を受託し、円滑な事業推進に向け鋭意取り組んでいる。

昨今の公共事業に対する厳しい批判のあるなかで、国民の理解及び地域社会の理解と協力を得ながら事業を執行していくために、本事業では現地視察の積極的な受け入れがなされている。当協会は、本業務のメニューとして現地視察者の対応窓口としての業務も担当した。本稿では、現地視察者の対応窓口としての取り組み内容と効果的な現地対応のあり方について報告する。



図-1 事業全体図

2. 現地視察の対応

第二京阪道路は、「緑立つ道」の名のもと、環境や景観に配慮した道路として全国的にも注目されている。このため、毎年多数の現地視察申入れがあり、平成 20 年度においては年間 5,000 人を超える視察者

*1(社)近畿建設協会 技術管理部 06-6943-6655

が全国各地から訪れた。視察対応にあたっては、浪速国道事務所と NEXCO 西日本の工事区間が混在しているため、事業者間の調整、沿線 5 市の各市域を担当する監督職員との調整及び複数の施工業者との調整等、多方面の関係機関との連絡調整が必要である。

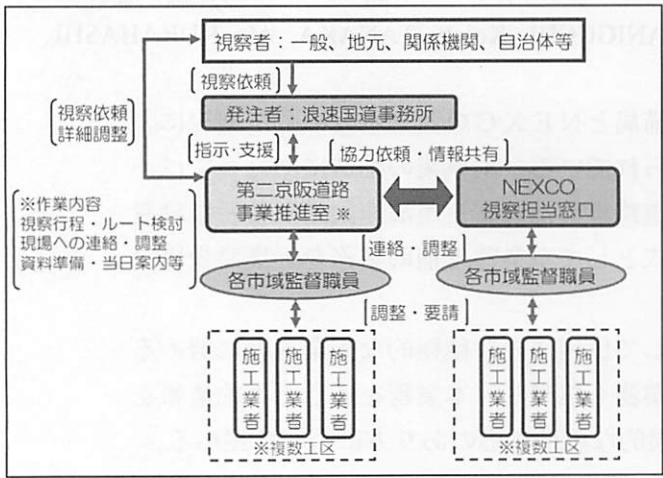


図-2 現地視察の対応フロー

また、『事業監理補助業務』を履行するなかで、用地、工事の進捗状況、関係機関との協議進捗、地元協議状況等、事業全体に関わる様々な分野の情報を推進室で集約し、各種資料を取りまとめている。

第二京阪道路の現地視察窓口として、これらの情報を有効に活用し、安全で円滑により多くの視察者を現地へ案内するため、以下に示す事項に配慮した。

(1) 工事工程を活用した「視察ポイント」の提案

工程監理のために毎月更新している「詳細工程表」（表-2）を活用し、いつ頃どの工事の視察が可能であるか全線にわたって把握し、視察案内する工事の特徴と期待する PR 効果等を取りまとめた「視察ポイント」を作成した。（表-1 参照）

表-1 視察ポイント例

視察優先度	視察ポイント名	工事の特徴	期待するPR効果	人数制約	視察時期	視察の受入れ
推奨	〇〇上部工事	〇〇架設工法	新工法〔工期短縮〕	中型バス	8月末完了	○
対応可能	〇〇工事	大規模掘削工事	環境対策	ワゴン1台	9月下旬	×
厳しい	〇〇下部工事	シールド工法	新技術〔コスト削減〕	大型バス可	7月以降	×

視察ポイントは、工事進捗に伴う現場の制約条件に応じて優先度を付けて整理し、工事進捗に影響を与えない範囲でより多くの視察申込に対応できるように適宜、更新した。これらの視察ポイントから視察者のニーズに合わせて視察箇所を選定し、行程を

立案した。
(2)視察ルートの選定と説明マニュアルの作成
現在、現場は最盛期を迎え、輻輳する工事のなか、現地状況は工事進捗に伴い日々変化している。こういった状況下での視察ルートの選定にあたっては、舗装工事による場内通行止め、橋梁架設やコンクリート打設による工事用道路の切り替え等、推進室で収集した現場状況の最新情報により、現場内を走行できない箇所については、迂回ルートを検討し、工事進捗に影響のない安全かつ最適な視察ルートの選定に努めた。

表-2 詳細工程表

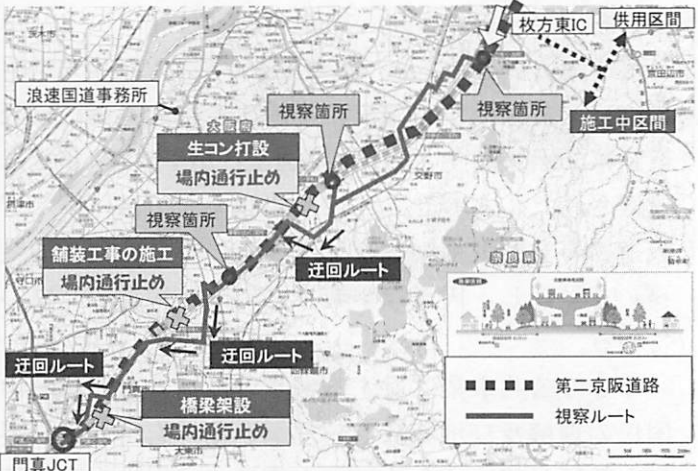


図-3 視察ルート図の例

また、事業の進捗監理のために毎月更新している用地、工事の進捗や占有物件、各関係機関との協議状況等を整理した各種管理表を基に、第二京阪道路全体の進捗状況を整理し、視察対応時の説明に活用すると共に視察のダブルブッキングや視察対応者の急な交代に備えて、視察説明マニュアルを作成し、誰が対応しても説明内容に差異が生じないように情

報の共有を図った。

3. 視察対応のカイゼン

前述の「2. 現地視察の対応」の結果、より多くの視察対応を可能とする一方で、視察件数の増加に伴う施工業者等現場サイドの負担が増してきたために、その軽減策として視察の重点化・効率化・安全性の向上を図っていく観点から「視察対応のカイゼン」を検討した。

(1) 視察対応の現状と課題

視察対応の現状と課題として、以下が考えられる。

- 1) 供用間近となり視察の増加が見込まれる。
- 2) 工事工程が厳しい中、説明員、安全誘導員の配置、工事の中断等の視察対応が現場負担となる。
- 3) 大人数の受入れは、工事進捗に伴い駐車スペースの確保が困難になる。

(2) 視察対応のカイゼン

視察対応のカイゼンにあたって現場の率直な意見を反映するため、施工業者等に対し対応頻度、工事進捗への影響度合い、その他意見・要望等に関するアンケート調査を実施した結果 43 件の回答を得た。

「事業 PR の良い機会」、「場内の整理整頓、安全意識の向上にも有意義である」と好評な意見もある一方で、「視察通路や駐車スペースの確保が困難」、「通り抜けは極力減らしてほしい」等、場内調整に苦慮している実態や負担軽減を求める意見もあった。アンケートを集約すると、「場内通過だけでは自社工事の PR となりにくく、工事進捗に多少影響がある」という意見を得た。

その改善策として、以下の対応方針を提案した。

- 1) 場内通り抜けを極力減らし、現道での移動ルートを選定する。
- 2) 工事現場外からの視察を推奨する。
- 3) 施工業者にも PR の機会を与える。
- 4) 大型バスによる大人数の受入れは控える。

さらに、現場の負担軽減を図るために、浪速国道事務所、NEXCO 西日本の関係者へ平成 20 年 10 月以降の視察対応に関する「視察対応のカイゼン」取組みについて説明し了解を得た。

その結果、工事に影響のない範囲での視察協力を得ることで、視察による現場負担の軽減が図られた。

供用まで残り 1 年となる今年度においては、更なる「視察対応のカイゼン」として、視察者側から所

定の「視察申込書」提出を必須とし、視察目的、要望を明確にした上、視察者のリクエスト応じて、よりポイントを絞った視察対応に努めている。また、一部の施工業者に負担が集中しないように、視察の分散化を図っている。

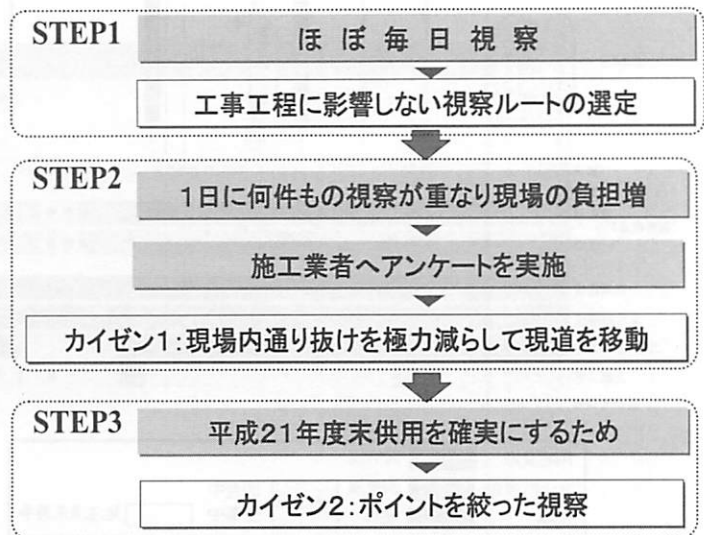


図-4 視察対応のカイゼンフロー

4. 効果的な事業PR事例

第二京阪道路は、市街地を走る道路として、騒音・振動等の環境対策に対する地域住民の関心が高いことから、地元、行政、工事関係者等多方面に渡る視察者に対する事業PRの他、事業の必要性やその整備効果をPRするツールの一つとして、現地広報の積極的な取り組みがなされている。以下に、事業PR方法の事例について紹介する。

(1) 進捗が把握しやすいグラフの作成

工事の進捗状況を判りやすく理解していただくために、全体像をイメージしやすいグラフ（図-5 進捗グラフ）を作成し、地元住民にも居住地区の工事進捗状況が一目で把握できるなど関心を持てるよう配慮した。

このグラフは毎月更新し、現地視察時に配布する他、浪速国道事務所のHPや沿線市に配布している「緑立つ道新聞」にも記載し、広く活用されている。

(2) 国民目線のわかりやすい説明

国民の道路整備に対するイメージとして「税金の無駄遣い」という厳しい批判の声が多いなかで、沿線住民の環境対策への関心も高い。このため事業に対する安心感と信頼性の向上に応えるため、常に国

民目線に立って、わかりやすい説明に努めている。

一方、事業者として、経済的な工法の採用によるコスト削減の取り組み事例や騒音の低減効果の事例等

について、具体的な数字を示すことや、身近でイメージしやすい表現に置き換える等、理解していただくための創意工夫に努めた。

グラフで見る第二京阪道路（緑立つ道）の進みぐあい (イメージ)

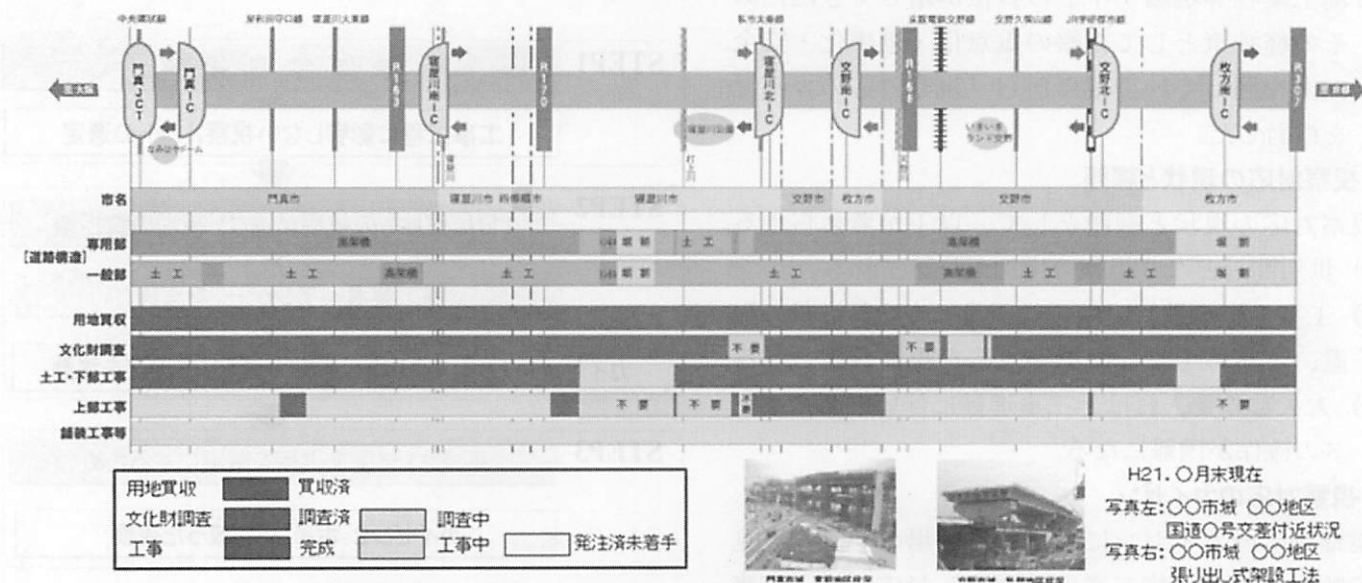


図-5 進捗グラフ

(3) 体験型の視察対応

視察者に公共事業をより身近に感じてもらうために、施工業者の協力を得て、様々な体験型の視察対応を実施している。事例として、学生向けには、トルシア高力ボルトの締付け体験や鉄筋結束作業体験等を企画した結果、「工事の作業内容について理解

騒音を懸念する住民への遮音壁の高さ体験等の「体験コーナー」を設置し、工事の安全性や事業に対する信頼の確保に努めた。

5. まとめ

視察対応のカイゼンの取り組みにより、工事に影響なく、より多くの方々への視察対応を可能とし、さらに、国民目線で「わかりやすく」かつ「丁寧」な説明に努める事が可能となった。

大規模事業における現地視察対応が、事業の理解と協力を得る上で非常に有効な手段であることから、今後の事業監理業務の一環として取り組まれることを期待する。

最後に、本業務を遂行するにあたり、ご指導を賜った浪速国道事務所、NEXCO 西日本並びに関係者の方々に深く感謝の意を表します。



が深まった」と好評を得た。

写真-1 体験型視察の状況

(左:遮音壁の高さ体験、右:トルシアボルトの締付け)

また、沿線の地元住民を対象とした見学会も積極的に計画し、子供を対象とした建設機械の試乗体験、

Assistant Management System For Promoting Daini-Keihan Road Project (II)

By Akira TANIGUCHI, Koichi TANAKA, Aki KURAHASHI

Organizing and dealing with the site visit are effective measures to get the public understanding and cooperation in a big project. It is expected to work as part of the project management in the future.